

ふるさとルネサンス

第4号(二〇〇六年九月)

歴史の破壊と保存

打田昇三

この原稿が活字になる頃には収まっていると思うが(そのように願っているが)中東のレバノンではイスラエル軍による「ヒスボラ排除」を名目とした侵攻が続いている。

理由はどうであれ独立国家に他国軍が入ってくるのは「侵略行為」なのだが、レバノンの場合は独立したときからフランスの軍隊が居座っていたから、誰でもズズカ入り込んで良いような錯覚を持たれていて、一九八二年のイスラエル侵攻を手始めに国防の手伝いをしたシリア軍も一時は定住してしまっただけ。

レバノン国民も割り切っていて、現地ですった地図にはシリアとの国境がはつきり書いてない。それどころか、国境地帯の町々にはシリアの王様や王子様の肖像画が嫌になるほどぶら下がっている状態だった。

日本の暢気な首相が「中東の平和」などと称してイスラエルやアラブ諸国を訪問したが、理路整然とした情報ほど怪しい」と言われている中東のことである。イスラエルがアメリカにヒスボラ退治の砲弾が足りないから売って呉れ」と頼んだりするし、先の内戦時にはロシアがシリアに武器供与をしていた。

開戦直後、水や食料を首都ベイルートに供給するベカー高原には多数のロシア製ミサイルが配備されたがイスラエル空軍の爆撃で一瞬にして吹き飛んだらしい。幾らタダでも使えない武器を提供するのは失礼である。

背後に隠れた大国が居る限り根本的解決はできないのに、宗教がらみで自分の意地を張り通すような人物に複雑怪奇な中東問題を解決できる筈もなく日本が出る幕はない。

ベカー高原はレバノン山脈とアンチレバノン山脈とに挟まれた地域で、今から約一万二千年前に人類が狩猟採取の生活から農耕牧畜を生活出した「肥沃な三日月地帯」の西端にあたる場所である。原始的と呼ばれる頃の人類に比べて、戦争好きな現代人が冷酷で無能で野蛮になったことは否定できない。

レバノンは一応、共和国となっているが、面積は日本の岐阜県と同じ、そのうち六〇％は砂漠だが、かつてはレバノン杉が鬱蒼たる樹林を形勢していた。アルファベットの改良と伝播に貢献したフェニキア人が造船に使ったり、エジプトなどへ盛んに輸出したりして伐採し続け山が消えたのである。

レバノンの都市は首都ベイルートだけだが、国内の至る所に貴重な遺跡がある。特に知られ

ているのが「バールベック」。ここは旧約聖書に記されたカインの町、一般の人類と違って猿からではなく林檎から生まれたアダムの息子が開いた町だそうで、その所為かどうかわからないがベカー高原では林檎とバナナが同じ畑で栽培できるから便利である。

バールベックとは「バール神の町」、バール神は「ノアの箱舟」で生き残ったセム系民族が信仰した土着の神様で、後にギリシャ神話のビーナスなど女神に変わっていくらしいが、辛うじて残る石像の彫刻に見る限りでは不気味としか言い様がない。多分、哺乳動物と爬虫類とを合成して創った神像であろう。

セム系民族は基本的には砂漠の民であるが少し知恵の回る部族は砂漠に決別して農耕民族になったり、フェニキア人のようにレバノン杉で船を造って地中海へ乗り出し交易の民としてカルタゴなどの国や植民地を広げた。

フェニキアの子孫と考えられるレバノンの国民は大部分がアラブ系で、何%かのアルメニア人がいる。三五〇万の国民の半分近くが首都に住む。ベイルートはかつて世界金融の街として栄えていた。アラブ人主体なのだから纏まっても良さそうだが、地中海の東岸に面して聖地エルサレムに近い国土が、宗教対立や歴史上の因縁と重なって、此の国の人々に不幸を齎すのである。

カルタゴ帝国はローマに滅ぼされたが本家のフェニキアは湾岸都市国家連合を構成していて、地中海東岸に大小幾つもの遺跡を残している。

そこへアラム人、海の民、ヘブライ人などが侵入して港湾都市を滅ぼし、やがてアレキサンダー大王、ローマ帝国、ビザンチン帝国、サラセン(アラブ)帝国、オスマン帝国などが入り込んでくる。

宗教的にはローマ時代以来のキリスト教圏であり、ビザンチン末期に正統派から分離した「マロン派」という東方典礼教会系の信徒が多い。その人々はアラブ時代に迫害を避けて山中に潜んだが、オスマン帝国はキリスト教徒の自治を許したので、マロン派は現在でもレバノンの有力な宗教である。

トルコ支配の後、此の地方はフランスに狙われたため、イスラム教徒の反発が強まって内乱も起こったりしたが、二十世紀初頭からはフランスが委任統治権を得てマロン派教徒を重視する政治が行われてきた。

国民は「マロン派キリスト教」「スンニ派イスラム教」「シーア派イスラム教」のいずれかに属して、身分証明書に必ず宗教を明記しなければならず、それぞれの代表が国政を担ってきた。いわゆる宗派の談合政治であるが、パレスチナの紛争が激化して難民が流入すると勢力のバランスが崩れ、特にヒズボラなどシーア派の過激分子が活動するようになり、隣国イスラエルとの対立が激化した。

一九七六年頃からは各国の過激派がパールベックなどに終結し始め、これを危惧するキリスト教徒の民兵組織も警戒を強めていたが遂に内戦に発展、隣国イスラエルが便乗して侵略を

開始、ベイルートは瓦礫化した。

一九九〇年代に入ってからやつと内戦が終り、破壊されたベイルートの復興が開始された。

それでも南部の国境地帯ではイスラエルの侵攻とヒズボラの対抗報復攻撃は小規模に続いていたのである。それがこのところ一段と激しくなり、復興したばかりのベイルート市内がイスラエルの爆撃で再び破壊され始めた。

三〇年近くに亘ってレバノン駐留を続けていたシリア軍は二〇〇五年の春に撤退を完了している。イスラエル軍はヒズボラを対象とした攻撃のつもりらしいが、結局はレバノンの全国民に被害を及ぼしている。

世の中は皮肉なもので、先の内戦では破壊された国会議事堂とか市庁舎とか中央広場などの瓦礫の山を取り除いたところ、地中から古代フェニキアの都市国家遺跡が現れた。

レバノン政府は悲しんだり喜んだりして貴重なフェニキアの遺跡を保護しようであるが、今回のイスラエルの攻撃で折角、見つけた文化財が砂利になるのではないかと心配になる。もう一度、別な遺跡が現れるなどという「奇跡」の嘘は当てにしないほうが良い。

二千年も経って「ふるさとルネサンス」に気づくのも遅すぎるようだが、神様の本場の「中東」では時空の感覚が壮大で、とても日本人が理解できるものではない。

イスラエルは西暦一三三五年の第二ユダヤ戦争でローマ帝国に負け、エルサレムから追放されたユダヤ人たちが千八百年も経ってから「此

処は俺たちの領土だ！」と主張して強引に建国した国だし、そのイスラエルと戦っている「ヒズボラ」のメンバーは「カルバラーの惨劇」を念頭に置いているらしい。

この事件はウマイヤ王朝時代の西暦六八〇年に、マホメットの孫に当たるアル・フサインとその家族及び警護の騎士従卒など約二百人が、バクダッドの下流百キロほどの地点にあるユーフラティス河畔のカルバラーで王朝軍に惨殺されたものである。

イスラム教シーア派(シーアアリー)はマホメットの血統を重視するから、甥であり娘婿であることを悼み嘆き、今でもその日・十月十日を忘れず「殉教の日」として敵愾心を高揚させているのである。こちらも事件からは千三百年以上を経過している。

こうなると、悪質残虐な罪を犯しても十五年やそこらで時効が成立するという今の日本の法律は何だということになる。社会が凶悪化している昨今、重罪は時効を五百年とか千年にしておけば、少しは犯罪が減るのではないだろうか。今でも物騒なイラクの首都バクダッドは、かつてシーア派のアッバース王朝が平安の都として建設したのだが、非アラブ民族に滅ぼされ、殉教者と同じ名前の大統領が戦争好き某国の大統領と喧嘩して破壊された。こうなると名前も当てにならない。

言うまでも無くイラクは人類最初のメソポタミア文明が発祥した大地で遍く知れ渡っており、

遺跡も多くが発掘されている。人類の貴重な遺産が長引く戦闘で粉々にされたら、レバノンの地下と違って再発見するということにはならない。

水戸へ行く機会があり、旧県庁前の水戸城空堀補修工事を目撃した。十三世紀に馬場資幹の築いた土手が崩落したので元の形に復元するのだと図面付きで説明がされていた。

馬場資幹は、曾我兄弟の仇討ち事件が原因で源頼朝に全領地を没収された大掾義幹の再従兄弟であり妹婿であった。大掾氏末流から平国香以来の宗家を継承し、鎌倉御家人として水戸に居ながら国府の幹部職員として石岡まで通勤していたと考えられている。

水戸近辺には佐竹氏や笠間氏などが居たから油断は出来なかつたろうが城郭建設が未だ本格化しない時期に、あれほどの深い堀を掘らせた馬場資幹は隙の無い深慮遠謀の武将だったのであると想像できる。

文化財として崩れた土手を補修できる国と訳も分らず破壊される国。どちらが良いかは言うまでも無いが、中東各地で起こっている宗教や人種や長い長い歴史が絡んだ複雑怪奇な争いでも、その根源を突き詰めて行けば、いつかはどこかに妥協の道がある筈。

レバノン内戦のときにベイルート市の中心部に在った一軒のレストランは、銃弾の飛び交う最中にも開店していて人々に食事を提供した。のんびり食べるほうもどうかと思うが目の前で睨み合っていた民兵も食事ときには来たろうし、

敵味方ともレストランに向けて発砲はしなかつたようである。また街のキリスト教会もイスラムの寺院も同様に壊されている。その平等感覚をなぜ平和共存に向けないのか？…中東にはそういう不思議が山ほどあるから日本人には理解できない。

中東の事情やイスラムの本質を知り尽くした本当の中立国に真の英雄が現れて平和を実現してくれることを切望するのみである。

おもてなしの「心」 鈴木真紀子

数年前合唱交流で岩手県遠野市を訪問したことがあります。

「遠野物語」という大曲の新譜を携えて作曲家や作詩者とともに行ったのでした。事前に念入りの打ち合わせをし、心のこもった歓迎を企画してくださった遠野市役所の方のとても温かい対応に心うたれながら、気持ちよく過ごした二日間でした。

市役所の方との会話で忘れられないことがあります。嬉しくて、私はそれを自分のふるさとのことのようにみんなに話しています。

「どこの市町村でもハード面（箱物などの施設）ではいろんなものがあります。でも遠野で自慢できるのはソフト面（市民たち）なんです。観光地で働く人にはもちろんですが、目が合ったらどうぞ誰にでも声をかけてみてください。

必ずいい思い出になります！」

市民への絶対的な信頼と誇りと郷土愛に溢れた素敵な表情でした。そして本当にその通りでした。普通に生活している人々との会話がとても温かく、旅人の心を潤おしてくれるのです。そのため何度も訪問したく（帰っていきたく）なるんです。

自分や自分の住んでいる町を省みる契機にもなったのと、やっぱり聞きたくなってひとりの語り部の方に質問しました。

「どうしてみなさんがこんなにも気持ちよい対応なんでしょう？」

私の直接的な質問に彼女はこう応えてくださいました。

「そう言っていただけなのは本当に嬉しいことです。人様にいうことではないのですが、私たちはみんなおもてなしの「心」というものをずっと勉強しているんですよ。」

そうだったんですね。おもてなしの心の勉強…。もともと日本人が持っていた「温かく受け入れる心」も使わなければだんだん薄らいでしまつものだから、学習と実習が必要なんですね。

石岡に転居して7年が過ぎました。それまでやっていた活動、外国の留学生などの受け入れを石岡でもまず個人ではじめ、時には実行委員を募ってそれぞれの得意な部分で活躍してもらったりしてきました。

ここ数年は大きな二つのグループの方たちが全面的に協力してくださって、沢山の留学生

や海外文化団体が石岡に滞在するようにになりました。私が自信をもって誇りをもって言えることは、石岡とその周辺の方たちの「ホスピタリティ」のすばらしさです。

色々な条件があつて他との比較はできませんし比較への興味ありませんが、よそ者の私だからこそ感じる「常陸の国の人々」の不思議な朴訥なあたたかさです。

ここにホームステイした外国の方たちは必ず石岡と茨城を大好きになつて帰ってくれます。その証拠に日本の家族のもとへ戻ってくる人たちの確率が高いんです。

これはすべて、関わつてくださった方たちが自分たちの素直な温かさを存分に表現して惜しみなく注いでくださるおかげだと思つています。そして逆説的ですが、石岡の方たちは、もしかしたら自分たちが輝けるチャンスをずっと心待ちにしているのかもしれないと感じました。

「鳥が選んだ枝 枝が待つていた鳥」

恋の心

近藤治平

一番人間らしい心とは、という問いがあつたら、私は迷わず「恋」と答える。何故なら、恋の心ほど自己中心的なものはないからだ。現にストーリー被害の連日のように報道されているではないか。

劇団「表現舎しゅわーど」つくばカピオホール公演

11月26日(日曜日)

朗読舞劇『石岡物語』

小林幸枝のサイン(手話)を基軸にした舞演技が

幻想的な『ふるさと物語』の世界へと誘います

生まれながらに音を知らなかった聾俳優小林幸枝が心に物語の声を聞き、森田流笛方堀井洋子の奏でる風の声に舞い、演技します。

石岡に生まれた新しい舞台表現「朗読舞/朗読舞劇」初の舞台公演です。

脚本：近藤治平 演出：白井啓治

出演：小林幸枝 山重幸 鈴木真紀子 しらみひろぢ

笛方：堀井洋子

石岡・ふるさとルネサンス劇団「表現舎しゅわーど」

2006年11月26日(日)14:00開演

場所：つくばカピオホール 料金：2,000円(税込)

猫のことを自己中心的な動物というが、決してそんなことはない。猫嫌いだつた私が、猫を飼うようになって分かつたのであるが、猫は人間の自己中心的行動に付き合わないだけなのである。

恋と愛は同一線上にあるように思われているところがあるが、恋と愛は決して同一線上のものではない。恋は、自分本位で成り立つものだけれど、愛はそれを否定したところにある。

愛とは、人間らしい自己中心の喜怒哀楽といった欲望をある意味否定した先にあるものだと見える。だから愛とは堅苦しいもので、時に無視したくなつたりもする。

しかし、愛は人間が社会というものを形成し、その中で自由自在に生きるためになくしてはならない、不文律の規範であるとも見える。恋はなくしても人は人として生きていけるが、愛をなくしてしまうと、人として生きていくこと

はできない。実に哲学的でややこしく、堅苦しいものといえる。

愛をテーマに、 の話を書いてくれないか、という依頼があると、私は逃げ出したくなってしまふ。そしてこう言ってしまう。

「愛をテーマだ？ そんなのは偽善的な坊主か牧師にでも頼んでくれ」と。

こんな尺度を与えてはいけないのだが、愛を「高尚」とすれば恋は「下世話」とでもなるのだろうか。しかし、人間らしさは下世話によく現れて楽しいといえる。生きるという行為そのものは実際のところドロドロと下世話なものである。だから、葛藤が生まれるのだから、それが物語にもなるといえる。あまり高尚だと、惚れた腫れたなどの大騒ぎのドラマを探し当てるのが容易ではない。

こんな言い方も出来なくはない。愛は「理想」恋は「実相」と。そして、あなたはどちらに生きますかと問われたら、私は、迷わず恋の実相と答える。

道を歩いていてすれ違った女性に、ちよつとドキッとして振り返り、恋とはいえないほどの恋心を点して自分の元気を取り戻す。そのうちとんでもない大きな「ドキッ！」をお互いに感じ、それこそ手に手を取って恋の道行きなんて事が起こつたら、それはそれは大層に愉快なことだし、人の喜ぶ下世話話にもなる。

そう考えると、一番大事にしなければならぬのは「恋の心」ではないかな、と真剣に思ってみる。そしてこれこそが、自分自身をおもて

なしする心かも知れない。

それで、というわけではないが、これからは恋物語以外は書かないにしよう、なんてことを思ってみたりもしている。

御霊送り

兼平智恵子

今年のお盆は、子供達二家族の帰省もなく、主人も仕事。私も父の新盆だったことで、我が家は留守がちのひっそりと静かな御霊のおもてなしとなつてしまいました。

中国大陸の大地に消えた主人の母と妹。退職まで二十日を残し逝つた主人の父。そして祖母、曾祖母。ところが何故か曾祖父の墓石がありません。しかし、そのことが、この家に嫁いできた私に歴史への関心を寄せる切っ掛けをもたらしてくれたのでした

「天狗党員だったらしい」

「ええッ、天狗党って？ 確かな証明は：」

平成二年、石岡に居住するようになって、祖先さまを預かつた私達は、九十歳の養母に聞いても判らず、親戚にも語ってくれる人もいなくなり、僅かな情報で旧玉造、旧牛堀の町役場で兼平与惣右エ門の名を突き止めることが出来たのでした。党員は家族のもとに帰れず、水戸の回天神社で祀られているとのことでした。

そこには、一八六四年十二月、尊皇攘夷（天

皇の権威の絶対化と開国反対の主張）の素志遂行半ばにして幕府に降伏した天狗党の志士達、八二〇名。福井県敦賀浜にあった十六棟の練倉に押し込められ、残酷非道の処遇にあい、この倉から引き出され、凶刃のもと敦賀の松原の地に消え、慙死を免れた志士達のほとんどは、この倉で餓死、或いは幸運に故郷へ辿着いたものの再び獄につながれ、無念の死を遂げたのでした。

天狗党の変から約百年後の昭和三十五年、練倉は解体されることになり、消亡を惜しむ水戸市民有志が一棟譲り受け、回天館と名付けられました。

安政の大獄から戊辰戦争までの殉難志士千七百八十五名を銅刻した忠魂塔がひっそりと、しかし力強く堂々と私達を迎えてくれたのでした。私は、塔に釘付け。胸の鼓動を抑えながら見ていく。うわッ！ 確りとその名は刻み付けられていました。

そして、次の私たちの行動は、終焉の地を探す旅となりました。

平成十一年十月九日。第七次松原神社大祭参列と殉難烈士慰霊と感謝の旅、に参加。寒気に耐えながら、地元有志の命を賭けた協力と涙なくしては語れない悲劇も残しながらの伊那路高森町（水戸浪士この道を通る碑）から飯田、清内路、馬籠、中津川の辿つた道の遂行。

雪の少ない水戸育ちの一行にとつて想像を絶する豪雪で難儀したことでしょう。武田勢最後

の陣屋、新保宿跡。

いよいよ水戸烈士の墳墓。武田耕雲齋ゆかりの地と彫刻された石門に入る。白い大きな立て札が目飛び込んでくる。全身が凍りつく。

武田耕雲齋等の刑死。

第一回処刑、元治二年二月四日、武田耕雲齋以下二十五名。

第二回処刑、全年二月十五日、秋山正光以下三十五名。

第三回処刑、全年二月十六日、浜野忠正以下百一名。

第四回処刑、全年二月十九日、細引忠保以下七十五名。

第五回処刑、全年二月二十三日、朝倉景敏以下十六名。

死しても日本を見守ると凜とした総大将武田耕雲齋の石像。数え切れない墓標。背後に、周囲約四、三四方メートル、高さ約四メートルの塚。その上には志土のみなさんの生きかえりと思わせる、雄雄しく立ちはだかる松の木。

風化した数ある墓標の中から、間もなく「兼」

こそ違うが「金平与惣右エ門」の名の発見。

「ああ、やつぱり」

両手に刻まれた名の冷たさを包み、後世を継いだ者の祖先を尋ね当てた感動のぬくもりの伝わば伝えと念ずるのでした。

明治十一年、明治天皇北陸ご巡幸の節。祭祀料賜った十月十日を祭日とし、毎年、松原町の皆さまの「みとさま」「みとさま」と「浪人まつ

り」の幟のもと、手厚い大祭を催して頂いていることに深い感動を覚えました。

己の身の為でなく、国の為に命を捧げた祖先の偉業を子供達に讃え伝えようと思っっています。今でも鎖につながれた志士達の様子が松原では語り継がれているそうです。

今年の御霊送り場所の入り口の鎖は確りと閉ざされていました。先祖をまた顧みるきっかけとなりました。

討つもはた 討たれるもはた 哀れなり

同じに日本の 乱れと思えば

(武田耕雲齋 辞世の句)

あたため続ける道

伊東弓子

四十九年前といえますと半世紀になります。当時の私は、そう、おさげ髪した青春の真つただ中でした。

「文化祭には各々課題を持って発表しましたよ」

その時私は、本当に咄嗟のことでしたが「伝説しらべをしよう」と思いつき、決めたことを今でも鮮明に記憶の中に留めています。

最初に相談したのは父でしたが、その後どんな門が開かれていったのでした。

若いうていいですね。

恐れることなどなく、今まで知らなかった十

一箇所の地名が紙の上に書き出されていくと胸が高鳴ってくるのを、今でもはつきりと覚えております。指導していただいた四人の方々、その道ではかなり造詣の深い方たちであったことを後で知ったのでした。

「後は自分で、まず歩くこと。その土地の人に話を聞くこと。それを記録すること。大事なことは、聞いたことをただ書くだけでなく、自分の気持ちを添えておくこと」と

と教えて下さいました。写真撮ってくれる人もいて三ヶ月くらいの間に故郷周辺で、言い伝えられてきたものをまとめることが出来ました。

この五十年近く、そこへの道は忘れることはありませんでした。その頃の風景の記憶はやはり過ぎし年月にあわせ色あせてきていました。衰えていく脳の活性化のために、孤立していく心の豊かさを取り戻すために、そして新鮮だった青春時代の驚きの感性を思い起こしたく、これらの場所を訪ね歩くことに決めたのでした。

(沖中不動尊) あの頃の沖中不動尊は、こんもりとした木立の中にあるお堂と道が自然体だったことを強く覚えてます。長い間「沖中」という名が、何故か心にかかっています。

今回、ご縁日や盆綱つくりに参加して、大人も子供も年寄も集まってきて、一緒に遊んだり、話をしたりするうちに、ここは人を育てるよい場所だと思って帰ってきました。

(親鸞上人爪書阿弥陀如来堂) あの日の親鸞上人阿弥陀如来のお堂の後には高浜の台がそびえ、草木が茂り、吹き出物・くさつぽができたらここに来てお参りし、治つたらお礼に「べつたら焼き」をあげたという。栄養状態や衛生状態の悪い中で、苦しんだ人、子供等が親鸞上人の威徳にすがる姿が目につかふ思いだったことが忘れられません。

今は裏の土が崩れないように整備されて、階段を登っていくと、高浜の町も湖や石川も一望できます。安らく場所で観音様もあって、地域の婦人達が子供の健やかな成長を願うそうです。こういう人々の積み重ねの中で育つていけば、今のテレビを賑わせているような不幸な出来事は起こらないはず。今、阿弥陀如来におあげするものはお焼きとか大福だそうです。

(船塚山古墳) あの時、船塚山古墳を覆っていたのは松の木でした。関東三大の一つという大きな、茨城の名の起りだったこともことも初めて知って驚いた思いがあります。その後、松の木は虫に喰われて全滅したとの事です。

今、古墳全体は芝に覆われていますが、遥かに筑波の山々や湖が見え、その時代の人々の声が聞こえてきそうな気がします。近くを通るバイパスの心配も抱えながら、紅い鯨の話話を話してくれた先生の夢を探しながら降りてきました。

その他、国分寺、深つぼ、わし塚とうなぎ塚、三村城跡と田、お稲荷さん等歩いて、若い頃に

感じたこと、今尋ねて感じた心などを添えてまとめてみました。

何といつても一番心の奥に残るものは、大井戸のかごぬけ地蔵の話と八木の縄とき地蔵の話です。時々、大井戸の御蔵川岸に立つて八木の方へ流された人のことを思います。

対岸の八木の堤に立つて縄を解かれた人がどうやって生き抜いていったのか等の思いを浮かべてみます。

長い間あたためてきたものがあつた幸せを、これから実らせるためにも、ふるさとルネサンスの人達と共に影響しあつて作り上げて行きたいと思つております。いろいろ教えてくださった四人の方も亡くなられました。

歩いて、見て、話を聞いて、思いを添えて綴っていくことを続けて行きたいと思つています。遠い日に写真を撮ってくださいました人も、もう一度話をしたり、十一ヶ所だけでなく残しておきたい風景を撮ってもらいたいと思つております。

今日は八日。

上弦の月はみられるでしょうか。

黄色い幸せの真珠

小林幸枝

我慢の超えた激痛で病院に運び込まれたのが七月十七日。胆石症とわかり、胆嚢摘出手術を迷わず決めたのが二十日。二十六日に手術の打

ち合わせ。そして、八月二日に手術することが決まった。

腹腔鏡手術だから殆ど痛みはないといわれていたけれど、矢張り手術前日は一人病室であれこれ考えていると、不安と緊張感で一杯になってしまった。そんな時、友人と知人が顔を出して、励ましを言ってくれたお陰で、手術当日は全く緊張感も不安もなく、楽な気持ちで手術をうけることが出来た。

どうせだから胆嚢を摘出するところを、モニターで確り視ておこうと思つていたのでしたが、麻酔が効いてくるとふわつと白い霞か雲の中に包み込まれたかのような状態に、肉体の感覚もなくなり視界も消えてしまった。

手術が終わわり、看護士さんに起こされたとき、突然にピンとした痛みを覚え、私、手術したんだと、ようやく現実を認識することが出来た。

術後何が辛かったかといえば、鼻から入れられた酸素チューブと尿チューブだった。特に鼻のチューブが最大の敵。鼻の痛みで眠いのには安眠できないのです。ちょっと身体を動かそうものなら麻酔なしで、今手術をしているような感じなのです。後で看護士さんに話したら、手術をした人は皆そう言うのだそうです。

さて、私を苦しめた胆石はどうだったのかと言つと、翌日父が小瓶に入れた小粒の黄色い真珠のような玉を見せてもらいびっくりしてしまいました。

小瓶の中には、直径5ミリほどの丸い黄色の粒が三十数個入っているのです。これが私の

胆嚢を我がもの顔に占拠して、激痛を引き起こしてくれたのです。

知人が、これを首飾りにすると良いのじゃないか、と言いましたが、こんなもの首飾りにしてあの痛みを舞を舞っているときに思い出しでもしたらとんでもないことです。でも、退院して改めて黄色の小粒を見ると、黄色い幸せのハンカチではないけれど、もしかしたらこれは黄色い幸せの真珠なのかも知れないと思えてきたから不思議です。

もうすっかり元気になりました。朗読舞の稽古もやっています。九月二十四日のアトリエ公演では、七月に予定していました万葉集を、ご迷惑おかけした分、更にスケールアップさせた舞いにして演じたいと思っております。

十一月のつくばピオホールでの公演も、三カ月後に迫ってきました。胆嚢から出てきた憎き石ですが、黄色い幸せの真珠であることを信じて、これからも精一杯頑張つてふるさとを謳つて参りたいと思っております。

宜しくお願いいたします。
改めて、急病とは言え、七月公演を中止としましてしまいましたこと、会報の場を借りて御詫び申し上げます。

今月のふるさとルネサンスの予定

絵と二行文教室

九月八日(金)・九月二十二日(金)

午後一時半～午後三時まで。

日々の暮らしの中に小さいけれど心を喜ばせてくれた出来事、発見を自由律に一行の文に紡ぎ、色に染めて、自分を褒める。

時には、思う人に褒めた自分を葉書に刷いてお裾分けする。暖かく楽しい教室です。

朗読サイン舞教室

九月十三日(水)・九月二十九日(金)

午後七時～午後八時半まで。

ふるさとの風に吹かれて一行に呟いた詩を石岡雛子をベースにした篠笛の調べに乗って口ずさみながら、サイン(手話)をもとにして組み立てた舞に舞う、心癒される教室です。無料体験随時受け付けております。一度体験してみませんか。

劇団「表現舎しゅわーど」アトリエ公演

九月二十四日(日)

一回目午後二時開演・二回目午後五時開演

第一部は、七月に予定していた万葉集「常陸の国の歌」を小林幸枝が新しい解釈の元にサイン舞を創作し挑戦します。万葉集をサイン舞技に表現するのは、舞台史上初めてのことです。関

東の名山「筑波山」を背景にしたおらかな万葉の愛の歌を比類ないスケール感を持って小林幸枝が舞います。

第二部は、うちだしょうぞう作「戦乱」をしらぬひろぢが朗読劇に演じます。劇中小林幸枝が友情出演します。

前売券1300円、前売ペア券2400円
カフェ・キーボー、しばのや酒店にて発売。

編集後記

「ふるさと自慢をつくりたい、ふるさと自慢をしたいのであれば、どんなことでもいいから大声を出して言おう」と小紙を始めたのですが、まだ十分な大声が出ていないと思っております。励ましのお手紙を頂いたり、勝手に言うな、とのお叱りの声を頂いたり、予想以上の反響を頂き、編集部としては大層嬉しく思います。会員には、拡声器をつけ益々に大声を出すように叱咤しております。色々なご意見をいただけることを心より願っております。ご意見をいただきました方々には、ここに謝意を申し上げます。
(白井)

編集事務局

〒315 0001

石岡市石岡13979 2

0299 24 2063

(白井啓治方)